

第二言語習得と生活環境の変化

— 動機を軸に —

松 田 節 子

要 旨

通常自然環境での第二言語習得というと、効率的そして効果的に習得が行われると考えられがちである。だが、実際は様々な社会心理学的な要因が直接、間接に影響しあい、必ずしもスムーズに習得が進むとは限らない。中でも動機は習得を促進するだけでなく、言語保持、言語喪失にも大きく関わると言われる。動機については統合的動機と道具的動機というモデルがよく知られているが、そのふたつのタイプの動機は時には独自に、そして時には絡み合って働く。本稿では生活環境の変化に伴い、統合的動機と道具的動機が順次に働いて第二言語習得を促進する過程と、そしてしまいには動機が減少し一種の fossilization の状態に至る過程をある成人の第二言語（英語）習得に見る。併せて、第二言語話者の第二言語（英語）への心理的距離の遠近が動機とどのように関わっているかを見る。

はじめに

英語教師でありながら英語に一種の心理的な違和感を覚えるようになったのはいつの頃からだろうか。時を重ねるごとに英語にたいする興味と関心と知識はむしろ高まりと深まりを増しつつあるのに、それとは逆に英語との心理的な距離は広がる一方である。英語に必死で取り組んでいたころには経験したことのない心理状態である。アメリカでの大学院時代はたしかに勉学の面では英語に苦しみ続けられたけれども、友人関係、日常生活の面ではさほど英語に悩まされた覚えはない。アメリカでの勉学を終え、帰郷し英語母語話者と日常的に接触する職場にあった時も同様である。要するに、かなりの時期英語力に確信らしきものを持っていたはずなのに、ここ数年その確信が揺らぎっぱなしなのである。英語を使う機会と場が極端に減ったことが第一の要因であることは疑う余地もないが、それにしても英語が遠く感じられてしかたがない。

よく考えてみると、英語にそのような印象を抱きはじめてのは周りに日本語を流暢に操る非日本語母語話者が増え始めてからである。当初は彼らの日本語の底を流れる英語的発想を感じ取っては妙に感心したり感動したりしていたのだが、そのうちなんとなく自己の英語が気になりだしたのである。日本語を外国語として話す非日本語母語話者の日本語に妙に感心している自己の英語ははたして英語的発想に基づくものであろうか。はたまた英語で話している時の自分は本当に言いたいところを話し得ているのであろうか。

ある言語の母語話者が非母語話者と話す際、無意識あるいは意識的に“foreigner talk”を用いる傾向があることはよく知られている。相手の言語能力と伝達能力がかなりの程度高い場合は“foreigner talk”は用いられないとしても、その代わり一種の“言い換え”が行われる可能性が高い。Canal & Swain (1980) は言語能力のモデルとして、(1)言語的能力 (linguistic competence)、(2)社会言語的能力 (sociolinguistic competence)、(3)談話能力 (discourse competence)、そして(4)方略的能力 (strategic competence) を設定している。このモデルは通常第二言語話者の言語能力を測る指針、あるいは第二言語（外国語）教育の指導目標（1989年学習指導要領）として提示されることが多いが、見方を変えれば母語話者にもそのまま適用できる。他者とのコミュニケーションをスムーズに行える人は上記の(1)から(4)の能力に長けていることは深く考える間もなく理解でき

るところである。さらに非母語話者とのコミュニケーションをスムーズに行うことのできる人は(3)と(4)の能力に恵まれていると考えることができる。

日本語の非母語話者の日本語を観察しているうちに頭をもたげてきた自己の英語への戸惑いや確信のゆらぎは、じつはこの(3)と(4)に密接に関連しているのではないかとある時から疑い始めたのである。つまり、本人としてはかなりの程度流暢にそしてある程度の自信をもって英語を使いこなしてきたつもりでいたが、ひょっとするとそれはすべて相手がこちらの英語能力にあわせて(3)と(4)の能力をうまく駆使してくれていたからではないか。もっと端的に言えば、自分は自分自身の英語能力を過大評価していたのではないかとの思いが頭から離れなくなったのである。

一度そのようなことが気になると自己の英語力への疑いは深まるばかりであるが、見方を変えればこのような疑いを抱くのは自身の英語力を客観的に見る態度が備わってきたからだとも言える。一般的に言って、英語を使えるようになりたいと必死になっている段階ではあまりにも英語との一体感がつよく英語そのもの、あるいは英語を使ってコミュニケーションをはかっている自己を見る余裕がない。それが、英語とのつきあいがある段階まで至ると英語との関係が一種の“安定期”に入り、それにつれて英語を客観視することができるようになる。その結果人によっては心理的な距離を覚える者もでてくるのではないだろうか。どうあがいても所詮英語は外国語でいつまでたっても自分のものにはならないという焦燥感と無力感。あるいは、英語で自己表現をする時に感じるどうしようもない違和感。一度そのような感情を覚え始めると英語との心理的な距離は広がる一方で縮まることはあまりない。

もちろん、世に英語の達人とよばれる人達は英語への情熱を失うことなく英語と接すれば接するほど英語との一体感をつよくし、英語力も母語話者並みあるいはそれ以上といわれるまでに至るものであろうが、普通の人達はなかなかそうはいかない。それどころか、ある段階まで達すると“fossilization”とよばれる状態に陥り、どんなにあがいてもその状態から抜け出せなくなると言われている。

周知のように“fossilization” (Selinker, 1972) とは外国語学習に特有の現象で学習者がある段階に達するとそこで言語習得が止まってしまい、どんなに意識的に努力を重ねても抜け出せない状態を言う。この現象は学習者がコミュニケーション能力を身につけた段階で頻繁に観察されている。The Critical Period Hypothesis を支持する研究者たちの中には fossilization を parameter との関連で捉え、成長期のある段階（思春期）を過ぎてしまうと母語話者並の第二言語習得はほとんど不可能であると見なす人たちがいる。Strozer (1994, 168) は、Schachter (1990) を引き、“A recent study of advanced learners of English led to the conclusion that an essential property of any adult L2 grammar is incompleteness...”と言い、incompleteness, つまり fossilization は成人の第二言語話者の言語能力の特徴だとしている。

Fossilization に関しては上述の Strozer 以外にも種々の見解や研究結果があるが、現段階ではなぜそれが起こるのか、またなぜ“defossilization”がむずかしいのかまだ解明されていない。

Fossilization と英語への心理的な距離と違和感は第二言語習得の分野で関連づけて議論されることはあまりない。だが、“動機”と絡めてこのふたつの現象を見るとなんらかの関係があるので

はないか。やや乱暴な言い方をすれば、この二つの現象は動機の減少あるいは喪失によって引き起こされる一種の飽和状態ではないか。本稿では自己の英語への内観そしていわゆる英語の自然環境で英語で生活している友人の英語との葛藤を観察しているうちに芽生えてきたこの疑問について考えてみたい。

1 自然環境での成人の非英語母語話者と英語

そもそもこのような疑問を抱くようになったのは在米の友人A子との対話がきっかけであった。今年で在米生活があしかけ27年に及ぶA子とは英語習得関係の文献と資料収集のため渡米するたびに会い、旧交を温めている仲である。ある日系現地企業の秘書をしているA子は言語の専門家ではなく、また特別言語に深い関心と興味を抱いているわけでもない。会えば、互いの近況報告または沖縄の現状などに話題が終始し、正面きって英語について語ることはない。そんなA子との語りであるが、こと話題が“子供”との関係に及ぶと決まりきったように“英語”の悩みが顔を覗かせるのである。

日系企業とはいえ、英語母語話者の上司の下英語で仕事をこなし、同じく英語母語話者である子供達と同居しているA子の英語力は英語教師の眼から見て“生活語”としての機能を十二分に果たしていると思われる。その英語もいわゆる“street learner”のものではなく、文法性、使用域(register)ともに適切で成人になってから渡米した者の英語としては申し分のないものである。そんなA子であるが、二人の子供との対話ではフラストレーションに陥ることがままあると言う。二人の子供はそれぞれ大学教育を終え、息子は職業人、娘は大学院生である。子供達が幼い頃英語母語話者である白人アメリカ人の前夫と離婚し、女手ひとつで子供達を育てあげたA子は子育ての節目節目で様々な問題を抱えてきた。幸い、それらの問題の多くは“母子の絆”をもって解決することができたが、子供達が成長するにつれ表面化した“言葉”の問題はA子の心にある種のこだわりを残し続けてきた。普通に考えて、第二言語として英語を習得したA子と英語を母語として育ててきたA子の子供達では英語力に差があるのは当然である。また、どんなにあがいてもA子の英語が子供達の英語のレベルにまで伸長することは望めない。A子は子供達との間に覚えるこだわり、あるいはズレは英語力の差から来ると考え、それを埋めるには自分の英語力を高める必要があると言う。そんなA子に英語力の自己評価をさせると、決まって弱点を formal English と academic English の語彙と構文に求める。A子には会うたびに英語力の伸長について尋ねることにしているが、当然答えは芳しくない。敢えて当然という表現を用いるのは傍から観察している眼にはA子の英語が fossilization の段階に至っているのが見て取れるからである。

既に触れたように、fossilization は学習者がコミュニケーション能力を身につけた段階で頻繁に観察されている現象である。しかし、その正体、あるいはメカニズムみたいなものはまだ明らかでない。また、一度 fossilize するとなぜ defossilize するのがむずかしいのかもよく分かっていない。

Fossilization には相当個人差が見られることも観察されている。A子の場合には英語力がかなりのレベルに達したところでその現象が観察されるが、対照的に全く初期のレベルで fossilize した

事例を比較のためにひとつ挙げておきたい。

(1) 初期レベルでの fossilization の例－B子の場合

B子も沖縄県出身で、家族でアメリカに移住してから25年ほどになる。その25年のほとんどを日本語の環境で過ごし、英語を使うことはめったにない。B子には一男一女がいるが、それぞれ小学校の頃渡米した子供達は英語で教育を受け、長女は日英両語に堪能なバイリンガルだが、長男は日本語はある程度聴くことはできるものの話すことはほとんどできない。家族で移住した他の事例でも頻繁に観察されているように、B子の家族では長女が母親そして時には父親の“通訳”の役割を果たしてきた。B子の場合、父母会、銀行、買い物と何をすることも長女に依存し、自ら行動することはほとんどない。社交の面でも、その範囲は沖縄県人にほぼ限定されており、英語を使う必要性は極端に乏しい。B子が英語を使う場といえば、子供達の友人が家に訪ねてくる時ぐらいである。その友人たちにしても、大方は沖縄県人の子女なので、日本語は話せないもののある程度は聴けるのでそこで使われる英語は一種の Japanese English である。なかなか英語を口にしないB子であるが、レストラン、郵便局に同伴した時に耳にした英語は、発音面では例によって [θ]、[f]、[v]、[l]、[r] などが上手く発音できず、構文は、“Two aerogram, please.” “She want stamp.” “My daughter. She work San Francisco.”のように形態素、前置詞がほとんど欠落し、埋め込み文が全く使えないようなレベルであった。

そのレベルの英語でもB子にとってはコミュニケーションを交わすのに十分であり、英語についてA子のような妙なこだわりは抱いていない。なにか困ったことが起きれば、長女に頼ればよいからである。ただし、終始頼られる長女の側からしてみれば、そのような母親は時として大きな負担となる。とくに、この長女の場合小学校の5年生の時に渡米した後数年はかなり英語で苦しんだものの後年は東部の名門大学を honor student として卒業するまでになったので、英語に対して全く努力をしようとしないうちに母親に複雑な想いを抱いている。3年前に調査に出向いた時、偶然その長女と2人きりで話す機会があったが、反抗心と嫌悪感から西海岸に住む家族から遠く離れた東部で大学生活を送っていた時でさえ1週間に幾度となく、ひどい時には日に2度、3度母親から電話がかかってきたと言う。その内容は娘を気遣うというものより、どこかから電話がかかってきたが何の電話なのか全く見当がつかない、電話番号だけはかろうじて聞いておいたので折り返しその番号へ電話をするように、というようなものが主だったと言う。電話代がかさんでひどい目にあったと話す長女の表情と語調からはある種の哀しみと諦めが感じられ、なんとも言いようのない気持ちに捕らわれたのを今もって鮮烈に覚えている。

(2) A子とB子の違い

A子とB子の英語との関わり方の違いは動機に因るものであることは明らかである。A子の場合渡米のきっかけはアメリカ人男性との結婚だった。そしてその後10年ほどは、夫婦間、子育て、夫の親戚とのつきあい、社交とすべてが英語のみという環境にあった。離婚後は日本人社会、県人会と日本語への回帰が始まったものの子供達との関係はやはり英語のみであった。夫を仲介

として間接的に英語に接していた環境から直接的な接触を持たざるをえなくなった後A子の英語は著しい伸びを見せた。A子には英語を身につけなければならない切実な事情があったのである。

それに対して、B子の場合は家族ぐるみの移住でことばはさほど問題ではなかった。夫は当然として、子供達とも日本語で用が足りた。PTA、所用その他英語が必要な場面では長女が通訳として居た。B子の場合、とくに長女の存在が大きな意味を持った。長女は小学校の高学年で移住したにしては言語面での適応が速く、中学校、高等学校、大学と英語の環境の中で優秀な成績で通し、周りからも高い評価を得ていた。言葉の面ですっかり娘に頼りきっていたB子は英語を学ぶ必要性を全く見出さなかった。アメリカでの暮らしが長くなるにつれ最低限必要な表現や語彙は徐々に覚えていったものの、先に示したように発音、文法面双方とも“Japanese English”の域を出ず、これが25年もアメリカで暮らしている人の英語かといつて訝ってしまうほどである。娘の側はそのような親を負担に感じる事がままあったようだが、親の側はそんな娘の心情を知る由もなく、英語にたいしてなんら不自由を感じることなく暮らしてきている。

言葉の面で不自由を感じる事のないB子は英語にたいしてこだわりを抱くことはない。アイデンティティが揺らぐこともない。アメリカで暮らすようになって言葉との格闘を強いられ、深刻なアイデンティティ・クライシスを体験したA子とは何から何まで対照的である。

2 動機について

A子とB子の英語との関わり方の違いは動機によるものであると先に述べた。動機が第二言語習得の大きな促進力であることに異議を唱える者はいないだろう。動機のしっかりした学習者は教師あるいは教授法の良否に拘わらず語学力をつけていく。動機づけが第二言語習得の成否を左右すると言ってもよいくらいである。A子とB子のケースにしても動機の有無、強弱が二人の英語力を大きく分かつ結果になった。なぜ、A子は英語習得で成功を収めることができたか。そして、なぜ、ある段階に至ったところで英語に違和感を覚えるようになったのか。動機を軸にそのふたつの事を分析する前に第二言語習得の分野で動機がどのように扱われているか今一度簡単に確認しておこう。

第二言語習得理論の分野で動機について一番広く知られている研究といえば、なんと言っても Gardner and Lambert (1972) の調査研究であろう。両者の動機に関する仮説は第二言語にたいする態度 (attitude) と学ぶ際の動機が語学学習に不可欠な要素であることから発する。つまり、たとえ言語にたいする能力と適性があっても、目標言語にたいして好意的な態度を抱かず、また動機を欠く者は、適性と動機の両方を持っている者に比べて習得が遅いという見方である。両者は中でもとくに動機を重要な要素と捉え、動機をさらに統合的動機 (integrative motivation) と道具的動機 (instrumental motivation) というふたつに分類した。

統合的動機とは目標言語の話されている国、文化、人達にたいして肯定的な感情を抱き、その国あるいは社会の一員として受け入れられたいという気持ちをもって第二言語を習得することをいう。このタイプの学習者は動機づけがしっかりしているので第二言語習得において successful learner になる可能性が高い。それにたいして、目標言語をある特別な目的(たとえば受験のため、

仕事のため等)をもって学習するタイプは前者のタイプとは対照的にむしろ自国の文化、人達に肯定的な感情を抱いているので第二言語を習得する可能性は低いと言う。

統合的動機が強力だとする理由として、Gardner & Lambert (1972) は統合的動機は人間関係に関わっており、長期的かつ継続性があるからだとしている。それにたいして、道具的動機は学習者個人の必要から出たものであり、短期的である。いったん試験に合格すれば、あるいは職が得られれば、道具的動機は衰えてしまうかもしれない。

Gardner & Lambert (1972) はこのふたつのタイプの動機が学習環境と目標言語の習熟度によりに関係しているか調査している。当初両者は上で述べたように統合的動機の方が道具的動機よりはるかに重要な動機づけの要因であると仮定し、カナダ、アメリカ、フィリピンの各地で調査を行った。その結果はカナダとアメリカでは仮説通り第二言語(フランス語)を学ぶ者は統合的動機の働きかけが強かった。しかし、フィリピンの第二言語(英語)学習者の場合は道具的動機の方がはるかに重要な要因となっていた。Gardner と Lambert はこの違いは学習者の社会で第二言語が果たす役割から生じると解釈した。つまり、第二言語が“外国語”として機能している社会では統合的動機の働きが強く現れるが、“第二言語”として機能している社会では道具的動機の方がつよく現れると解釈したのである。

Gardner & Lambert の仮説については続いて行われた種々の研究で、その妥当性と有用性が試されている。たとえば、Clement (1986) はオタワ大学の293名のフランス語話者の学生を居住区での majority group と minority group に分けて、個人的変数(variables)、口頭面接そして英語能力試験の三点から調査している。そして、integrativeness は言語表現能力とは関係がない、majority, minority という立場(status)とも関係していない。一番関係しているのはいずれのグループの場合も自信(self-confidence)であるとの結果を引き出している。

また、カナダのブリティッシュ・コロンビアの Sekani 族の言語習得を調査した Lanoue(1991) は、目標言語に否定的な態度を抱いていてもその言語を習得する強い理由があれば第二言語習得が成功を収める事例を挙げている。Lanoue によれば、Sekani 族の場合はアングロサクソン文化にたいして否定的な態度を抱きながらもまた英語からなんら社会的・経済的な利益を受けるためでもないのに自民族集団でも英語を使用している。その理由は英語が Pan-Indians のシンボルになり、それこそが部族の将来のアイデンティティを約束する唯一の手段だと見なしているからだという。

さらに、マレーシアの教育実習生の言語学習動機は統合的なものと道具的なものが混ざり合ったものだとする Yatim (1988) の研究。アメリカのフランス語学習者の学習成果から Yatim 同様ふたつの動機が密接に関連し合って第二言語習得を促進するとする Burstall (1975) の研究など、その他多くの研究がある。

以上見たように、Gardner と Lambert の動機の研究については様々に見解が分かれる。その理由は質問表に基づく self-report 方式から抽出した学習者の回答の妥当性と信頼性を客観的かつ科学的な方法で再確認する方法が今のところないところにある。しかし、ベーカー (1996、121) は「Gardner のモデルの価値は、既存の言語学習の社会心理学的研究のまとめであるというだけで

はない。それは完全なモデルとして直接、手順をふんで実験されており、収集されたデータに適合することが確かめられている。ここが多くのバイリンガリズムの理論と異なるところである。つまり、従来の理論は以前の研究をまとめたものであるが、その理論に対して厳密な実験を行っていない」と高く評価している。

動機についてこれまで述べてきたことを一言でまとめると、動機は心理的、社会的な影響を受けやすい、つまり、動機は“動的”な面をその本質として有しているということである。動機は決して一定不変ではなくその時々、状況によって変化し、それに伴う社会的あるいは心理的な変化が時には統合的なものとして、時には道具的なものとして第二言語習得に直接的、間接的に影響を与えると考えられる。

3. 英語習得の軌跡と生活の変化との関連について

A子の場合もこの27年間の心理的、社会的な変化に伴い、英語への態度と英語習得の動機が微妙に揺れ動いたと考えられる。A子はどのような変化あるいは過程を経て英語にたいして現在のような心理状態、つまり一種の違和感を覚えるようになったのだろうか。生活の変化がA子の英語習得に及ぼした影響を見ることでその要因を探ってみよう。

(1) 第一期—統合的動機が強く働いた時期

渡米してからのA子の生活は大きく三つの時期に区分することができる。まず1969年に渡米し結婚生活を送っていた10年間。この期間は前夫が白人アメリカ人男性であったことが大きく生活に影響した時期である。夫の両親との同居、夫の姉妹や親戚とのつきあい、夫あるいは夫の両親を介しての社交、その他買い物、雑事など生活全般にわたってすべて英語優位の環境であった。

その頃のA子は白人文化へ同化しようと懸命であった。二人の子供にたいしても日本語を使うということはほとんどなく、子育ての言語はもっぱら英語であった。1970年、1972年と夫の両親と同居中のA子を訪ねた時も特別言葉に不自由しているという様子はさほど見てとれなかった。夫そして夫の両親との関係もよく生活も安定していたこともあって精神面でも情緒面でも安定していた。とくに、生活のすべての部分で夫の全面的な手助けがあったことが精神的安定に大きく与かっていた。

この段階で興味をひくのはA子と二人の子供との関係である。通常国際結婚をした母親は子供をバイリンガルに育てたいと考えられている。日本在住の国際結婚をした母親に面接調査をした新田(1992、44)によるとその考えの底流にはつぎのふたつの理由がある。まずひとつは親としての情、気持ちである。国際結婚をした母親は親子のコミュニケーションをスムーズに進め、そして子供との関係を良好に保つためには子供は親の使う言語を理解すべきであり、そのためにはバイリンガルに育てる必要があると考える。そしてふたつめの理由は功利性あるいは期待感である。つまり、バイリンガルであれば将来就職をするにしても有利だとの考えである。

ひとつめの理由をもっと詰めて見ていくと、その背景には母親の深い心理的・社会的欲求が見え隠れしているのが分かる。普通に考えて母親は自分を形づくった文化を子供に伝えたいと願う

ものである。そして、自分の文化に根差す特定の事柄を子供に伝えるには自分の母語をもってしかできない。新田(1992、55)はそうした事柄の典型が、童話や童謡をはじめとする育児と密接な結びつきを持つ行為や働きかけだという。新田が面接した日本在住の外国人の母親は自分が英語やその他のことばを聞きながら、こうした行為や働きかけを経験したために日本の童話や童謡では内的、情動的な対話が成立しないと語っている。

そのような母親とは対照的にA子は子育てでも自分にとっては外国語である英語で行った。なぜA子にはそのような母親としての思いが働かなかったのか。まず考えられることはA子の英語への強い思いとアメリカ文化への同化願望である。結婚生活の最初の5年を夫の両親と同居していたA子は慣れないアメリカでの暮らしの中で子育てについても姑の手を借りた。極端な言い方をすれば、その間のA子は姑が孫に語り聞かす様々な童話や童謡をアメリカ文化の大事な部分として子供と共に学んでいくという立場を取った。その気持ちの背景には夫の属する白人文化へ同化したいとの強い欲求があったことは明らかである。とにかくその頃のA子は“アメリカ人”になりたい気持ちで一杯で日本語はほとんど念頭になかった。その結果、A子の英語は見事な伸びを見せた。とくに、生活面における英語は大学院生として在米していた筆者のそれをはるかに凌ぐものだった。専門書を読む語彙力、文法力では勝っていたものの、流行小説、テレビドラマなど生活に密着した面ではとても勝負にならなかった。

つぎに考えられることはA子の渡米当時の英語力と夫の存在である。A子は大学で英語を学ぶ機会こそ得なかったものの渡米する頃にはある程度のコミュニケーション能力を有していた。(英検で言えば、2級レベル程度だったと推測される)それは外人商社で秘書として働いたキャリア、ラジオ講座などを利用した自主学習の成果であった。十分とは言えないまでも一応コミュニケーションを交わすだけの英語力を持っていたA子は渡米当初からことばの面でさほど不自由を感じることはなかった。なにより、A子には夫という力強い味方がいた。また、A子にとっては英語は学ぶに値する大きな目標で英語に囲まれた環境は願ってもないものだった。

それにたいして、新田(1992、55-56)が面接調査した日本在住の外国人の母親たちの場合は日本語に不自由な思いを抱いているものが多かった。彼女たちの多くはこどもとの関係において日本語では自分の本当に言いたいことを表現できないというもどかしさと苛立ちを感じていた。こどもになにか言おうとしても、それが本当に自分の言いたいことなのだろうかと自問自答をする。そんなことが何度あったかしのれない。それでいてぴったりの日本語を見つけることができない。大体こんなものだろうと思って口にした場合でも、どうも自分の思うこととどこか違う。こどもに本当に言いたいことが表現しきれない。ある母親は日本語を使うもどかしさをこのように語っている。さらに、これらの母親たちは日常生活で日本語母語話者である夫の助けをあまりたのむこともできなかった。

普通に考えると、日本語に違和感を覚えるというこれら母親の心情の方が共感を得やすい。とくに外国語を通して自らの経験や自己の文化的価値を語る、あるいは感情、情緒を共有する努力を試みたことのある者ならこれら母親のもどかしく歯痒い気持ちがそれこそ手に取るように分かるだろう。このような感情は必ずしも言語能力あるいはコミュニケーション能力のレベルが上がっ

でも弱まるものでない。むしろ、ことばに敏感で表現に正確さを求めるタイプの人には自己の第二言語能力が伸びれば伸びるほど母語と第二言語のズレに気づき、第二言語にたいして一層もどかしさを感じるようになると思われる。

ことばに敏感で夫そして子供たちとの心の通ったコミュニケーションをなによりも望んでいたA子がそのようなズレやもどかしさを覚えなかったのは当時(1970年代初期)の世界での日本語の地位が微妙に影響していたと推測できる。日本の経済成長に伴い今やアメリカでも学習者数が急増した日本語も当時はあまり学ぶ者のないアジアの一言語にしかすぎなかった。アメリカにおいては日英語のバイリンガルの価値が必ずしも高くなかった時代と言い換えてもよい。アメリカの国力が強大でアメリカ文化が隆盛であったその当時の英語の優位性は揺るぎのないものであった。A子は“国際語”である英語を学ぶことと英語を通して日本よりはるかに国際的地位の高いアメリカ社会へ同化することに意味は見出せても、日本語と日本文化の保持にはあまり意味を見出せなかった。その気持ちの現れが子育ての段階での日本語の軽視に繋がったのであろう。端的に言えば、A子は子供に日本語を伝える価値をあまり認めなかったのである。

このように見てくると、A子のアメリカでの最初の10年は統合的動機につき動かされてひたすら英語に向かって突き進んでいった時期だといえる。この時期のA子は英語とアメリカ文化にどっぷり浸かり、自分の母語と母文化を振り返ってみる余裕などなかった。A子は英語と共に在り、英語もA子と共に在った。

(2) 第二期—道具的動機が強く働いた時期

そのようなA子の生活も離婚で大きく変わった。続く10年はA子にとってすべての面で試練を強いられた苦しい時期であった。まず、経済的な問題があった。もはや夫の援助を頼むことができなくなったA子は自立の道を探ってコミュニティ・カレッジに通い始めた。幸いA子には秘書という渡米前のキャリアがあった。A子はそのキャリアを再度生かすべくコミュニティ・カレッジでビジネス関係の科目をいくつか受講することにした。日常言語としての英語には不自由しなかったとはいえ、アメリカで初めて正式に英語で授業をうけるA子は“reading”と“writing”でひどく苦勞したと言う。それまでは英語で困ることがあれば夫という心強い味方がいつもすぐ側にいた。しかし、今やことばの面においても自立を迫られたA子はほとんど孤立無援の状況で、初めて正面から英語と向き合うことになった。この時期をA子自身はとにかく生きぬくために必死で英語と格闘した時期だという。

この時期のA子の“格闘”を第二言語習得研究の分野から分析するとつぎのふたつの興味深い点が見えてくる。まず、Krashen (1982, 10) のいう“無意識の習得”と“意識的な学習”である。Krashen は真の第二言語習得は無意識の習得を通して起こり、そしてそのためには多量のインプットが必要だとした。対して、意識的な学習は知識として蓄えられ自己訂正のためモニターとして働くことはあっても実際のコミュニケーション能力には貢献しないとした。“無意識の習得”と“意識的な学習”を画然と分ける Krashen のこの仮説の妥当性と信頼性については数々の反論があり必ずしも一般性を有したものとは言えないが、“無意識の”習得と“意識的な”学習という概念は

外国語を学んだ経験のある者ならなんとなく分かる。たとえば、文法読解中心、あるいは受験中心である学校英語は意識的な学習を強いるのにたいして、英語母語話者とつきあう、英語の歌を聞く、映画やビデオを観るなどは無意識の習得につながるというように。

A子の場合、離婚前の英語習得は無意識の習得にあたる。既に述べたようにその時期のA子はアメリカ人の夫との一体化、アメリカ文化への同化を夢見てただひたすら英語と接していた。統合的動機に突き動かされ、学習しているという意識など無いまま四六時中英語のシャワーを浴びていたA子にとって英語は苦痛の対象というよりアメリカ人に近づく喜びの対象とでもいうものであった。もちろんその背後には夫という非常に大きな存在があった。なにか分からないことがあっても夫がいる。家庭生活、子育て、社交、すべての面において夫の助けをたのむことができたこの時期は第二言語習得につきものの精神的、心理的負担からも自由でそして Krashen(1982, 21-22)の用語を借りれば、comprehensible input と $i+1$ の input に溢れた理想的な環境であった。また、努力と勉強は必ずしも成果にはつながらない。なにかを成し遂げるには“absorption”と“flow”が必要条件である。同じことが第二言語習得にも言えるとして、“Flow appears to be involved in language and literacy development as well. The acquirer, according to the input hypothesis, must be completely focussed on the message, “forgetting” that the goal is language acquisition.”と主張する Krashen(1995, 348)の第二言語習得観が表すような“absorption”と“flow”の時期でもあった。そのような環境の中、A子の英語力が目覚ましい伸びを見せたことは先に触れた。

ところが、そのような英語習得環境も離婚を経、コミュニティ・カレッジに通うようになると一変した。無意識の習得は意識的な学習へ、統合的動機は道具的動機へと変容したのである。それまでは楽しみながら身につけていた英語が一度学習の対象となると苦痛の種となり、とくにそれまでほとんど必要のなかった書くという作業が大きな負担となった。が、まだ幼い子どもを二人抱え自立の道を探らざるをえない状況にあったA子は文字通りがむしゃらに英語に取り組んだ。この頑張りが大きく実を結び、経済的自立につながる結果になるのだが、加えてこの時期に学力言語能力が大きく伸びた。

Cummins (1984) がバイリンガルの言語能力を伝達言語能力と学力言語能力に分類したのはよく知られている。前者は BICS (basic international communicative skills) と略称され、ことばを話す上で文脈の助けと支えがある場合に働く。日常言語を駆使する能力と言い換えてもよい。一方、後者は CALP (cognitive/academic language proficiency) と略称され、「コンテクストの支えがない」学業的な場面で働く。この分類法についても実証的な裏付けがない(Martin-Jones & Romaine 1986)、言語と認知の関係についていまだ明白でない (Edelsky et.al. 1983, Rivera 1984) などの批判があるが、ここでは便宜上そのまま用いることにする。

第一期にあたる10年でA子は英語圏で暮らすのに相応の伝達言語能力を身につけてはいたが、コミュニティ・カレッジでの英語習得はそれまでとは性格を全く異にするものであった。既に述べたように、コミュニティ・カレッジで最もA子を苦しめたのは“reading”と“writing”であった。そのふたつの技能のなにかとくに問題だったのかある時尋ねると、“語彙”と“文法 (syntax)”

という予測どおりの答えが返ってきた。日常言語と学力言語のギャップは母語においても問題となる場合が多いが、それが第二言語となると意識のされ具合が違う。A子はコミュニティ・カレッジで学ぶことで初めて“academic English”と“formal English”に接し、英語の難しさに直面したといえる。このコミュニティ・カレッジでの経験は後々尾を引くのだがそれについては後述することにして、この時期のA子とはとにかく生き抜くために必死で勉強した。この時期の英語力、勉強の成果についてのA子の自己評価は必ずしも高くはないが、その後シリコンバレー在の企業に経理関係の秘書として採用されたことからみると英語能力、専門知識ともかなりの程度に達していたと見なすことができる。

生活面での不安、離婚による情緒不安、物心ともに苦しい状態にあったこの10年、英語はA子にとって生きるのに絶対必要条件というようなものになった。英語はもはや喜びをもたらす対象ではなく、その代わりにアメリカで生きていくのに必要な“道具”となった。

この頃からA子は日本人社会、県人会との関わりを持ち始め、母文化へ回帰し始めるのだが、英語との“関係”はまだ良好だった。職場でのよりよい地位を目指して、英語母語話者である子供たちとの絆をより強固にするため、そして必ずしも英語が達者なものばかりではない日本人社会、県人会での自己の地位をより確実にするため、まだA子は英語と共にあり、英語もA子と共にあった。そして、それに呼応するようにA子の英語力も伸び続けた。A子にとってこの10年は経済的、精神的には苦しい時期ではあったが、言語的には英語母語話者である夫の助けを借りなくても英語社会で生きていけるという確信を得た大事な時期であった。おおげさな表現をすれば、離婚をとおして始めて英語はA子の真のこことばとなったのである。

離婚前の10年、離婚後の10年、この20年の間に英語にたいする心理的な姿勢は微妙に変わり、英語を学ぶ動機も統合的動機から道具的動機へ移行していったが、英語力そのものは伸び続けA子自身その伸びを実感しているようであった。

(3) 第三期－動機の減少と英語への違和感の始まり

しかし、そのようなA子と英語との“平和な”関係も二人の子供が大学へ入学するころには微妙に変わり始めた。子供との対話に行き違いが生じるようになったのである。A子をはじめそれをことばそのものの問題というより親と子の対立という一般的な事象として捕らえた。ところが、時間が経つにつれ徐々にことばの問題が重くのしかかってきたという。一人前となった二人の子供との対話はもはや親と子というより個と個の対話となり、A子の手持ちの語彙と表現力では子供たちに太刀打ちできなくなったのである。将来を考え出したこどもたちとことある毎に議論になり、その度に英語で言い負かされるという状態が続くにつれ、A子は子供とのあまりの英語力の差に始めて気づき動揺したという。それを境にA子の英語への心理的距離が微妙に変化していくのだが、A子自身はそのような英語と自分との関係をあくまでも英語能力の観点からとらえ、英語を改めて勉強する必要性を会う度に口にする。そんなA子に英語のなにを今更勉強する必要があるのかと問うと決まって formal English と文法と語彙との答えが返ってくる。実際英語で暮らしていてどういう場面でその必要性を感じているのか重ねて聞くと、予測どおり子供との関係

との答えが返ってきた。それではどうすればその三つの面での力を補うことができると思うかとさらに問い返すと、それが分からないから英語教師であるあなたに相談しているのだとますます真剣な表情をされ困ったことがあった。

ともあれ、そのような英語についてのA子との対話で気づくことはA子の formal instruction への過度なる評価である。中学校、高等学校と英語を学んだとはいえ、もろもろの事情から大学教育を受ける機会に恵まれなかったA子は常に自分の英語にたいして一種の引け目を感じているような印象を受ける。既に触れたようにA子の英語は客観的に見て成人になってから渡米した者の英語としては文句のつけようのないレベルに達している。それでもなお formal instruction にこだわるのは formal instruction を受けさえすれば英語力がさらに伸びると考えているからである。

たしかに instruction を通して身につくものは多い。たとえば Ellis (1987: 12) は instruction の有用な役割をつぎのようにまとめている。

- (1) まず、学習者のレディネスに応じて文法項目を導入することができる。その結果、'instructed learner'は'rule'を自分で発見しなければならない'uninstructed learner'にくらべてその文法事項を早く習得できる。
- (2) インプット中の特定の formal features に気づかせることができる。
- (3) 'Informal language use'が主である自然環境では習得が難しい'formal register of language use'を導入することができる。

(1)~(3)を通して言える instruction の長所とは、結局「時間の経済性」と「注意力の喚起」そして「formal register の導入」ということになる。自然環境では雑多なインプットが整理できないまま学習者の目や耳に入ってくる。そのような状況では“at random”に語彙や表現を拾い上げ、自分なりの類推をもとにインプットを整理することになるのだが、このようなやり方では一つの規則を導き出すにも相当な時間を要する。それに比べて instruction が行われる教室環境ではその都度必要なインプットがレディネスに応じて与えられるので無駄な回り道をする事が無い。

また、自然環境の言語習得では重要な言語形式などに気づかず習得が遅れる場合が多いが、教室環境では注意を向けさせられ意識的に学習することができる。第二言語習得では意識的な学習と無意識の習得がそれぞれ有用な働きをすると見なすことができるが、成人の第二言語習得においては特に前者が有用な役割を果たすとの研究結果が多い。(e.g. Schmidt, 1990; Kihlstorm, 1984; Posner and Klein, 1973)

このように見ると、文法と formal English の力に欠けると感じているA子が instruction に拘るのも十分理由があるように思える。が、Ellis の挙げる三つの有用な役割が役に立つのは基礎レベルから中級レベルにある学習者にとってであって、文法力が十分に備わった上級レベルの者がさらに高度の英語力を身につけるのを望むときは自助努力によるほかないのではなからうか。A子の場合 instruction を必要とする段階はすでに越えている。第一、A子には日本の中学校と高

等学校で正式な英語教育を受けた経験がある。その当時（1960年代始めから半ば）の日本の英語教育は今以上に受験中心、文法中心であった。そのような教育を受けたA子は潜在能力として英文法の知識を持っていると考えられる。

A子の formal instruction 願望をさらに詰めて聞いていくと、コミュニティ・カレッジでの1年が大きく影響していることが分かる。既に触れたように、A子はコミュニティ・カレッジに通うことで始めて academic English に接する機会を得た。客観的立場からするとそこでの経験を通してA子の言語能力はさらに深みと広がりを見せたと思うのだが、A子自身にとっては英語力の足りなさを見せつけられたショックな経験となったようである。その気持ちはこどもたちと議論を交わす度に強くなり、とくに大学院生である娘のアカデミックな面での悩みについて相談を持ちかけられる時にその気持ちが強くなるとのことである。

先にも触れたようにA子は滞米生活20年後に起こったこどもたちとのコミュニケーション・ギャップを自分の英語能力に帰するものと考えている。そのことについてある時娘の意見を聞いてみた。主に母親の英語能力という観点から尋ねたのだが、その答えはこちらの予測を裏付ける心強いものであった。と言うのは、やはり娘も母親の英語能力をかなり高く評価していたのである。その中でも印象的だったのは明らかに母親を誇りとしているところだった。他の日本人母親と比べて英語が流暢である。発音面ではたしかに“foreign accent”は残っているものの語彙、文法そして話の内容とも正確である。どこへ伴っても、誰に会わせても引け目を感じるところがない。そのように語る娘の表情からはA子が感じているコミュニケーション・ギャップを匂わせるようなものはなかった。第2項の(1)で触れたB子と母親との関係と比較すると、A子の娘のことが意味するところがよく分かる。

英語能力についてA子本人の自己評価と娘の評価が必ずしも一致しない理由のひとつはA子は自己の英語能力を客観的に測る機会に恵まれていないからだろう。Formal instruction の場合だと段階ごとにテストなどがあり達成度や弱点に分かり自己の英語力のレベルも判断できる。また、Schumann (1978) と Perkins and Larsen-Freeman (1975) の実験結果が示すように、instruction を通して身につけた言語能力（文法能力）はテストなどの際に分析能力として働く場合がたしかに多い。テストを受ける機会がほとんどないA子は自己の文法力を知りようがない上、自分の隠れた文法力が果たして分析能力として機能するかどうか確かめる術がない。その結果、必要以上に自己の英語力を過小評価していると考えられる。

現在A子はキャリア・アップを目指して4年制大学でビジネス関係の科目をいくつか受講することを考えている。首尾よく受講できたとして、そして過去コミュニティ・カレッジで学んだ時のように努力を重ねたとして、たしかに専門分野での語彙は増大し、読解力も深まるだろう。が、英語そのものが大きく伸びることはおそくないだろう。と言うのは、上で触れたようにA子の英語は instruction の効果を受ける段階は既に越えている。後は自助努力に頼るしか方法はないのだが、A子の心の中にはもはや渡米した時のあの熱病に浮かされたような英語への想い、そしてアメリカ文化への憧れはない。また、離婚後子供二人を抱えて生き抜かなければならなかった時のように必死で勉強をしなければならない理由もない。キャリア・アップを目指して科目を取る

とは言っても、それはあくまでゆとりの部分でのことである。A子の英語は本人がいかに評価しようとして一定の水準に達しており、日常生活や仕事においてことばの面で実質的に困ることはない。このように考えると、やはりA子の英語は fossilization の段階に達していると思なざるをえない。

4. 違和感の底にあるもの

A子がなんとなく感じる英語への違和感、あるいは子供たちとのコミュニケーション・ギャップの原因はA子の英語能力の低さというよりむしろつぎの二つに根差していると思なほうがいいだろう。まず、A子の英語能力の高さである。逆説めくが、子供たちが幼い頃は全くと言ってよいほど感じなかったコミュニケーション・ギャップを今頃になって感じるというのは非母語話者としての自己の英語と母語話者としての子供達の英語を比較できるだけの能力が身についたからではなかろうか。つまり、同じことを言うにしても、語彙のレベルあるいは表現のレベル、またはレトリックが両者の間では異なる。言ってみれば、相手は“おとな”の英語で話しているのに自分は“こども”の英語しか使えない。A子は今にして始めて英語母語話者である子供達が Canal & Swain (1980) 言うところの方略的言語能力 (strategic competence) を用いて自分とのコミュニケーションを図ってきたことに気づき、翻って自己の英語力に疑問を抱き始めたのではなかろうか。

滞米生活が長くなるにつれ、仕事の面での経験を積むにつれ、理解能力は増しても表現能力は必ずしもそれに正比例して伸びるわけではない。理解能力と表現能力の間のギャップについては母語においても頻繁に観察される当たり前の現象であるが、外国語のばあいは意識のされ方が違う。これは母語習得と第二言語習得の習得過程を考えれば分かる。言うまでなく、前者は無意識の習得をとおして行われる場合が殆どである。それにたいして、後者の場合は無意識の習得と意識的な学習のどちらか、あるいは双方が入り混じって行われる。A子のように日本の学校教育で英語を勉強した者は当然意識的な学習から入っている。加えて、A子の場合、“formal instruction”に信を置いている。このように見ると、どうもA子はいまもって英語を学習の対象と捕らえ、そして formal instruction を受けることで英語能力の伸長がはかれると考えているのではないかと思われる。だからこそ、英語を勉強する必要性を口にし、子供達の英語との差を己の勉強不足と結びつけて考えるのであろう。もし、英語が無意識に習得した母語であれば、果たしてA子が子供達との語彙、表現そしてレトリックの差についてこれほど悩んだかどうか怪しい。意識的な学習から入った外国語であるばかりに、そして常に学ぶべき対象であったばかりにA子はいつまでたっても英語にたいしてある種のこだわりを抱き続けているのではなかろうか。

こども時代にアメリカへ移住し、ことばの問題で悩み、ついには母語のポーランド語と第二言語の英語を自己の内部で融合させ豊饒なる内的世界を築いたエバア・ホフマンは英語と自己の関係をつぎのように語る。

「今ポーランド語を話す時、私の頭の中の英語がまぎれ込み、浸透し、言葉を屈折さ

せる。二つの言葉は互いに修正し合い、混ざり合い、肥沃になる。どちらの言葉も互いに相対的なものにする。誰とも同じように、私は自分の言葉の総体である。(中略) だがおそらく私は言葉の間の割れ目、構築物のレンガの割れ目を他の人々より敏感に感じ取っていると思う。その亀裂はときどき私を苦しめるが、ある意味ではそれが私が生きている証しになる。」(1992、340)

ホフマンの言う亀裂は二重言語生活を送るほとんどの者に共通する経験であろう。A子の場合もその例に漏れないと思われるが、両者の英語観は大きく異なる。ホフマンは英語が自分の血の中に流れ込んだ実感を愛しみ、英語をとおして体験する自然、生活、人間関係のすべてが“意味”を持つようになった歓びを文中で述べている。ところが、A子の場合はアメリカで暮らす時間が長くなればなるほど、英語での生活を重ねれば重ねるほど英語との関係が複雑に変化してきている。

これまでその原因のひとつを言語能力の観点から探ろうとしてきたわけだが、もうひとつ考えられることは先にもすこし触れたようにA子が渡米したあとの日本経済の発展とそれに伴う日本語学習熱である。A子が渡米した頃の欧米諸国と日本の力関係と現在のそれとは全く様相が異なる。かつてその差が歴然としていた頃は欧米諸国の文化は過度に理想化されていた。とくに、A子が渡米した27年前のアメリカはおおかたの日本人にとって“憧れ”の国であった。A子にとってもアメリカに移住し、アメリカ社会の“一員”になるということはその憧れを現実にするものだった。そして、英語はその大事な手段であった。すくなくとも渡米してから後の10年はA子の中での母文化と母語の存在は小さいものであった。だからこそ、A子は子育ての段階にあってもことばの問題で悩むことはなかった。A子にとっては、ふたりの子供を夫と同じアメリカ人に育て上げることは当然のこととして、自分も“アメリカ人”になる努力を重ねる必要があった。しかし、離婚を境として、憧れていた“白人アメリカ文化”から疎外されるようになると、心の拠り所を求めて日本人社会、とくに県人会とのつながりを深めるようになった。その間、日本の経済は驚異的な成長を遂げ、それに伴い日本の国際的地位は高まり、その波及効果として日本語に関心を寄せる外国人の数も急増した。その変わりようは27年前にはとても想像できないものだった。日本人社会そして県人会との関わりを強めていくに従い、離婚でアイデンティティの危機に直面していたA子の精神状態も安定の方向に向かい、日本語への回帰も強くなっていった。小此木(1990)は異文化圏での心理機制が滞在国の文化と母国の文化の力関係に微妙に影響を受けることを指摘しているが、A子の場合も日本の国際社会での地位向上がアイデンティティの再確立を助ける方向に働いていたのは間違いない。その影響は当然母語である日本語にも及び、昨年(1996年)会った時は娘の日本語学習の件でいろいろ心を砕いている様子が見て取れた。

A子本人は自分の中での日本文化と日本語の“復権”をことさらに意識している様子はないが、社交のほとんどが日系アメリカ人または県人会で日本語を介して行われていること、沖縄の伝統芸能をたしなんでいること、そして機会を捕らえては日本文化の紹介に努めていることなどを考え併せると、A子の中で今、日本文化と日本語がどのような位置を占めているか容易に想像でき

る。それに伴いA子の心の中の英語の位置が微妙にずれ出したとしても当然の理であろう。かつては圧倒的に英語が優勢であったA子の言語生活は離婚後、家庭と職場では英語、社交は日本語という一種のバイリンガル生活に変化している。

モノリンガルな言語生活からバイリンガルな言語生活へ。この変化がA子の心理状態に全く影響を与えないはずはない。とくに、英語にたいする影響には大きいものがあると思われる。離婚するまで、A子にとって英語こそがアメリカでの自分の地位を確かにする手段だった。だからこそ、なにかに憑かれたかのように英語に熱中し、日本語はほとんど眼中になかったのであろう。離婚後、A子が日本人社会、県人会に近づいたのは傷ついた自己を癒し、アイデンティティの立て直しを図るのが第一の目的であった。日本語を話す、日本語で話すことはむしろ二義的なものであったと当時を振り返ってA子は言う。

A子が日本人社会へ接近し出した時期は日本の経済成長の時期と重なる。それが日本語にもたらした影響は改めて言うまでもない。アジア諸国は言うに及ばず欧米でも日本語学習熱が高まった。A子本人は全く意識していないようだが、このことが日本語回帰を始めたA子の心に与えた影響は大きい。英語に加え、いまや多くの人が学びたいと思っている言語の母語話者である。いままであまりにも自然で当たり前で、その分価値を認めるのが難しかった日本語の価値の転換。それがA子のそれまでの英語コンプレックスを薄める作用をしたと仮定しても無理はないだろう。長い間A子の心の中で片隅に追いやられていた日本語の復権はA子本人が気づかぬ間に徐々に英語への情熱を奪い取ってきたのではなかろうか。

日本語への回帰は子育ての段階では全く省みられることのなかった母文化の継承にも影響を及ぼしつつある。この現象はとくに娘との関係において顕著である。ここ数年、娘は日本語の習得に意欲を示し、母親とともに琉球舞踊の稽古にも通う。それもA子の側から意識的あるいは意図的に働きかけた結果生じたものではなく、なんとなく始まったとA子は言う。そして、そんな娘の話をする時のA子の表情は決まって明るい。娘からの母親の言語と文化への肯定的な態度と評価。このこともまたA子の日本語と日本文化への再評価と再認識を大きく助けているに違いない。英語>日本語の力関係から英語=日本語の関係への漸進的な移行。それにつれてA子の英語への関心度と必要度が低下してくるのはむしろ当然の成り行きであろう。

以上、見てきたことから、A子がなんとなく感じる英語への違和感、あるいはこどもたちとのコミュニケーション・ギャップはA子が言うように必ずしも英語力の差だけから生じるものではなく、1)英語能力が増加したばかりに自己の英語を客観的に評価することができるようになった、2)母語である日本語が国際社会で勢力を増大し、その地位が向上した、というふたつの要素が微妙に影響していることが分かった。

それでは、1)と2)の観点からもう一度A子の英語へのこだわりを整理してみよう。これまで何度も触れたように、A子は自己の英語力を伸ばす必要を感じている。そして、そのためには“formal instruction”を受けるのが早道だとしている。だが、A子の英語の伸びが最早あまり望めないだろうことは既に述べた。その大きな理由としてA子の英語が fossilization の段階に入っている可能性を示唆した。本稿では、その現象を“動機”との関連で捕らえることをひとつの目的としてい

た。動機を軸にA子の英語との関わりを見ていくと、統合的動機から道具的動機へとライフ・サイクルの変化につれて動機そのものが変動していく様子が見て取れた。そして、子供ふたりが成長し、A子本人もいわゆる“decent job”に就いた段階でどうもその動きが止まってしまったらしいことが窺われた。その頃までには、A子の英語は日常生活においても仕事の面においても十分機能するレベルに達していた。併せて、渡米した後一時期自己の心の中で無意識に殺しかけた日本人としてのアイデンティティの回復があった。この二つのことから、A子が意識の上では英語を伸ばす必要性を幾ら感じても、無意識下では今の自己の英語力に満足している可能性が十分ある。既に見たように、やはりA子にはもう英語にたいする“情熱”も“必要”も残っていないのであろう。

最近の脳の研究によれば（松本 1996、14-15）、「脳は自らが価値を認めた情報を認知処理する回路を脳内に作る。価値情報によって脳の活性が制御されるからである。価値判断は認知情報処理と密接に結びついて一次、二次、三次などの多段階にわたって行われ、高度な価値情報処理回路が作られていく。第一次価値判断で不快と捉えた情報も、認知系で思い直して価値があると考えたのでは、その情報に対する脳内回路を作る効果として最高には至らない。たとえば、ピアノの練習は嫌だけれど、ピアノを弾くことがファッションとして格好が良いという理由で認知系からピアノ練習に価値を与えたとしても、ピアノを弾くこと自体に真に価値を感じていないので、ピアノを弾くための脳内回路の建設はそこそこの程度で飽和してしまう。ごはんが食べられなくても人からほめられなくても、ピアノを弾くことが無上の喜びであり、生きがいであるとなって初めて、脳はピアノを弾くための回路を最も効率よく作る。好きこそもの上手なれ、である。」

上のことは俗に言う“英語好き”の現象の説明にもなる。英語がよくできる人と言うのは大体においてまず英語が好きである。そして、そのような人たちはだれに言われるともなく英語に没頭する。上のピアノの例と同じように、訳もなく英語が好きでたまらずただただ英語を勉強するのである。

A子の場合も正にそのケースだった。渡米前、渡米後の10年、A子はただひたすら英語に夢中だった。その背後には当然個人的且つ現実的な理由があったが、それよりも何よりもただがむしゃらに英語にしがみついているという印象だった。その結果として英語力が著しく伸びた。しかし、今のA子にはどう見ても以前のような情熱はない。その理由についてはこれまでいろいろ推察してきた。もし上で述べた脳の研究が信頼性を持つとすれば、英語それ自体が喜びの対象ではなくなった今、A子の英語を学ぶための脳内回路は飽和状態に至っていると考えられる。だとすると、A子の英語は本人の学ぶ“意志”（認知系での英語の価値の見直し）とは裏腹にあまり伸びないであろうとの結論に達しざるをえない。

結 び

定義が難しいこと、動的であること、などから動機のような学習者要因についてはその客観性が問われることが多いが、それでも第二言語習得にはそれらの要因が複雑に影響しているらしいことは誰も否定できない。A子の場合、英語習得を促したのは1)内部から突き上げてくるなにか、

と2) ニーズ、であった。そのふたつの要素のそれぞれがある時は統合的動機と絡み合い、ある時は道具的動機と絡み合い、そしてある時はその双方と絡み合って、英語習得が促進されてきた。道具的動機については仕事を得心するためとか、受験のためとか、外的な要因から説明できる部分が多いが、統合的動機についてはまずもって学習者がなぜそのような心情を抱くようになるのかはつきりしたところはない。ただなんとなく直観的に分かるのは統合的動機は1)と関連しているということである。内部から突き上げてくるなにか、というような表現はおおよそ客観性が無く科学的ではない。従って、研究、考察の対象にはなりえないと思われがちだが、英語学習の過程でそのなにかを体験した者は多いはずだ。そしてそのなにかを感じる者ほど自助努力を重ね、英語を習得していく率が高いということは“客観的”な事実である。

厄介なことは、その“なにか”は決して恒常的ではなく、時間とともに変化するものであるということである。日常的に英語を用いる環境にあれば、時間を重ねれば重ねるほど英語能力が伸び、終いには母語話者と対等な能力を持つまでに至ると通常は思いがちだが、どんなに環境、条件に恵まれてもなかなかそこには至らない。Fossilizationに直面してしまうのである。そのfossilizationにしても現象的には観察されているもののそのメカニズムについてはまだ解明されていないことは既に述べた。ただ、推測できることは、“なにか”が消滅、あるいは弱まった時点でその現象が起きるのではないか、そしてその“なにか”はとくに統合的動機と密接に関連しているのではないかということである。それがいつ、どのように消滅あるいは弱まるかについては説明は難しい。

A子の場合もその“なにか”の減少によりfossilizationの段階に入っているとの一応の結論は引き出したが、キャリア・アップが絶対に必要な状況に立ち至った時、つまり新たにニーズを感じた時道具的動機が再び力を得て、その結果A子の英語が本人が納得するような伸びを見せるか否かが目下筆者にとっては一番の関心事である。

A子の英語習得の過程を観察して再確認させられたのは、まず第一に第二言語習得の成否は個人に帰するところが大きいということである。第二に、その成否の実感、あるいは評価が個人の置かれた状況によって大きく分かれるということ、そして第三に第二言語習得は“動的”なものであるということである。そのいずれもいままで当たり前にいわれてきたことで、結局第二言語習得の“常識”に立ち返ったようなものである。常識や直観を見直せば思いがけない発見があるとよく言われるが、A子のケースは正にその一例であったような気がする。

参考文献

- Bialystok, E. & Hakuta, K.(1994). In Other Words. Basic Books.
- Brown, D.H. & Gonzo, S.(1995). Readings on Second Language Acquisition. Engelwood Cliffs: Prentice Hall Regents.
- Burro, A. et.al.(1993). “Cultural studies for advanced language learners”. In D. Graddl, L. Thompson, and M. Bryan(eds.). Language and Culture. Clevedon: Multilingual Matters.
- Burstall, C.(1975). “Factors affecting foreign language: a case consideration of some relevant research findings.” Language Teaching and Linguistics Abstracts, 8, 5-125.
- Canal, M. & Swain, M.(1980). “Theoretical bases of communicative language teaching and testing.” Applied Linguistics, 1(1), 1-47.
- Clement, R.(1986). “Second language proficiency and acculturation: an investigation of the effects of language status and individual characteristics.” Journal of Language and Social Psychology, 5, 271-90.
- Crawford, J.(ed.). (1992). Language Loyalties. Chicago: The University of Chicago Press.
- Cummins, J.(1984). Wanted: a theoretical framework for relating language proficiency to academic achievement among bilingual students. In C. Rivera (ed.). Language Proficiency and Academic Achievement. Clevedon: Multilingual Matters.
- Edelsky, C. et. al.(1983). “Semilingualism and language deficit.” Applied Linguistics, 4(1), 1-22.
- Ellis, R.(ed.). (1987). Second Language Acquisition in Context. New York:Prentice Hall Regents.
- Ellis, R.(1994). The Study of Second Language Acquisition. Oxford: Oxford University Press.
- エヴァ・ホフマン (木村博江訳) (1992). 『アメリカに生きる私』 新宿書房
- Gardner, R.and Lambert, W.(1972). Attitudes and Motivation in Second Language Learning. Rowley, Mass: Newbury House.
- Hatch, E.M.(1978). Second Language Acquisition: A book of Reading. Rowley: Newbury House.
- ジェイムズ・クロフォード (本名信行訳) (1994) 『移民社会アメリカの言語事情』 ジャパン・タイムズ
- Jin, L. & Cortazzi, M.(1993). “Cultural Orientation and Academic Language Use. In D. Graddl, L. Thompson and M. Bryan (eds.). Language and Culture. Multilingual Matters.
- 小池生夫監修 (1994) 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』 大修館書店
- 小西正恵 (1994) 「第7章第二言語における学習者要因」小池 1994.

- コリン・ベーカー (岡秀夫訳) (1996) 『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店
- 近藤裕 (1981) 『カルチュア・ショックの心理』創元社
- Krashen, S.D.(1982). *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Pergamon Press.
- _____ (1995). "The cause-effect fallacy and the time fallacy." In J.Alatis, et. al. (eds.). *Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics*. Washington D.C.: Georgetown University Press.
- Lanoue, G. (1991). "Language loss, language gain: cultural camouflage and social change among the Sekani of Northern British Columbia." *Language and Society*, 20, 87-115.
- Kihlstorm, J.(1984). "Conscious, subconscious, unconscious: A cognitive perspective." In K. Bowers, and D.Meichenbaum,(eds.). *The Unconscious Reconsidered*. New York: Wiley.
- Lukmani, Y.(1972). "Motivation to learn and language proficiency." *Language Learning*, 22, 261-731.
- Martin-Jones, M. and Romaine, S.(1986). *Semilingualism: A half-baked theory of communicative competence*. *Applied Linguistics*, 7(1), 26-36.
- 松本元 (1996) 「人とはなにか <中> 脳から見た心」言語 1996, 25(11), 12-17.
- 新田文輝 (1992) 『国際結婚とこどもたち』明石書店
- O'Malley, M.J. & Chamot, A.U.(1990). *Learning Strategies in Second Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Perkins, K. and Larsen-Freeman, D.(1975). "The effect of formal language instruction on the order of morpheme acquisition." *Language Learning*, 25(2), 237-43.
- 小此木啓吾 (1990) 「自立と同一化の異文化体験」青年心理 84, 143-152
- Posner, M. and Klein, R.(1973). "On the function of consciousness." In S.Kornblum (ed.). *Attention and Performance*. London: Academic Press.
- Rivera, C.(ed.). (1984). *Language Proficiency and Academic Achievement*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Schachter, J. and Yip, V.(1990). *Grammatical judgements: Why does anyone object to subject extraction?* *SSLA*, 12, 379-92.
- Schmidt, R.W.(1990). "The role of consciousness in second language learning." *Applied Linguistics*, 11, 129-58.
- Schumann, J.(1978). "Second language acquisition: the pidginization hypothesis." In E. Hatch et. al. (1978).
- Selinker, L. (1972). "Interlanguage" *IRAL* X: 209-30.
- Spolsky, B. (1989). *Conditions for Second Language Learning*. Oxford: Oxford University Press.

Strozer, J.R.(1994). Language Acquisition after Puberty. Washington, D.C.: Georgetown University Press.

田中春美他 (1987) 『言語習得と英語教育』 ELEC

Yatim, A.M. (1988). Some factors affecting bilingualism amongst trainee teachers in Malaysia. Unpublished PhD thesis, University of Wales.

付記

本稿と先に公表した「動機づけについて」(1996年7月『沖縄国際大学文学部紀要英文学科篇』Vol. 15. No. 1.) および「自然環境での成人の第2言語習得—1事例を中心に—」(1995年2月『沖縄国際大学教養部紀要』Vol. 20. No. 2 2) は本学の平成5年度～平成7年度の特別研究の成果である。